

中学校

平成 6 年 度

教育研究員研究報告書

音 楽

東京都教育委員会

平成6年度

教育研究員名簿(音楽)

区市町村名	学校名	氏名
新宿区	西戸山中学校	○富田優子
品川区	戸越台中学校	伊藤京子
大田区	大森東中学校	江間信明
豊島区	長崎中学校	遠藤与穂子
足立区	新田中学校	上田千鶴
葛飾区	一之台中学校	平本麻貴
江戸川区	小松川第二中学校	◎和田新悟
八王子市	第三中学校	荒井佐和子
三鷹市	第一中学校	榎本京子
清瀬市	清瀬第五中学校	津山文彦

◎ 世話人 ○ 副世話人

担当 教育庁指導部高等学校教育指導課指導主事 神原陸男

目 次

I	主題設定の理由	2
II	研究の経過	3
III	研究の内容	4
1	合唱指導における現状と課題	4
2	音楽的感動を主体的に共有することの意義	4
(1)	音楽的感動を主体的に共有することはどのようなことなのか	4
(2)	音楽的感動を主体的に共有することはどのようにして可能か	5
3	音楽的感動を主体的に共有するための指導の工夫	6
(1)	学級の良い人間関係や雰囲気をつくるための工夫	6
(2)	授業の導入における工夫	7
(3)	選曲の工夫	8
(4)	発声指導の工夫	8
(5)	リーダー育成及びパート練習の工夫	8
(6)	より美しい合唱の表現力を育成するための工夫	10
(7)	評価の工夫	10
(8)	その他（各行事での校歌指導の重視等）	11
4	指導事例	12
事例 1	「はじめての授業（校歌歌詞の交換）」第 1 学年	12
事例 2	「遠い日の歌（パッヘルベルのカノン）」第 2 学年	15
事例 3	「音楽的感動を共有する合唱指導」第 3 学年	18
事例 4	「音楽の自由な表現の学習（女声合唱）第 3 学年選択	21
IV	まとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

現代は、人間相互のつながりが希薄になりがちであるといわれている。その背景には、物質的な豊かさの中で生活していることや私たち一人一人の生活が他者に依存しなくとも、比較的容易に成り立つことが可能であることなどがある。そのことにより、日常生活の中でも、様々な人間関係を通して、その都度のできごと等に深く感じ、「感動すること」が体験されにくいともいえる。このことは、学校教育活動全体の状況や生徒一人一人の価値観の多様化の中に現れていると考えられる。

音楽科の授業においても、上記のような社会的背景にもとづく課題として感動体験の不足が指摘されている。今日の音楽学習においては与えられた楽曲を指示通りに演奏することだけでなく、自ら学習課題を発見し、自分たちで工夫することの中から感動をつかみ取ることができるよう学習の機会が、できるだけ多く設定させることが大切である。したがって、一斉指導を中心とした教師主導型の授業展開を改善し、生徒が生き生きと活動し、充実感を味わえるような授業展開を工夫していくことが必要である。

本年度の研究員は、このような今日の音楽科の課題に対し、合唱活動こそが音楽的な感動、心の（意欲の）扉を開かせるための最も基本的な音楽活動ではないかと考えた。合唱表現活動の中で、他者と感動を分かち合う喜び、そして、その喜びを繰り返して体験したいという心情を生徒一人一人に持たせることは、感性の育成のために大切なことである。そのための教師の工夫が授業の中で具体的に実践されなければならない。そこで本年度の研究を推進していくに当たり、研究員相互の日頃の授業における問題点を出し合い、その中で多くの共通する課題を見出し、授業の場作り（生徒との人間関係や雰囲気）から、導入の工夫、選曲、発声指導の工夫、リーダー育成・パート練習の工夫、評価の在り方に至るまで、具体的な方策を求めていくこととした。

一方、新しい学力観では、学習の結果だけではなく、学習への「動機づけ」などの工夫を通して、学習していく過程の中での生徒の変化を適切に評価していくことを重視している。また、「関心・意欲・態度」の観点を重視することにより、生徒の全体像を評価し、それが可能となるような指導の在り方を改善していくことが求められている。合唱活動は、特に生徒の「意欲」が直接的に発揮されやすい活動である。一方、指導の方法によっては「意欲」が現れにくい状況になりやすい活動でもある。本研究員は、このような実情を踏まえ、新しい学力観の提示によって求められている指導及び評価の工夫を具体化することにより、生徒一人一人の心の中に音楽的感動を主体的に共有させ、充実感を味わわせることを目指して本主題を設定した。

Ⅱ 研究の経過

本年度の研究員総会が発足後、月1回のペースで例会をもち、授業での悩み、実態などに基づき、研究主題を設定し、研究を行った。経過は以下のとおりである。

<5月>

本年度の研究主題を設定するにあたり、「音楽の基本である“歌う”ということを通して音楽の楽しみを知り、合唱により皆がひとつになる喜びやすばらしさを体験して欲しい」という願いを根底におくことを全員で確認し、合唱指導について研究を求めることを目指し、テーマを設定した。

<6月>

研究員各自の授業の進め方について、指導案を持ちより、現在の改善すべき点、やってみてよかった点などを発表しあい、その中で成功事例、失敗事例の原因・背景などを検討し、合唱活動を基本とした授業展開のよりよい方向性を協議した。

また、各行事の様子についても、情報交換を行った。

<7月>

5月、6月で研究協議したところを踏まえて、全体的に次のことについて、研究を深めることを確認した。

- (1) 導入の方法（雰囲気作り）
- (2) パート練習の効果的な方法、及びリーダーの育成について
- (3) 選曲の工夫
- (4) 音楽を深めさせる工夫
- (5) 行事での校歌指導について等

<8月・御岳集会>

ここでは、7月に決めた研究事項について、十分協議し、具体的に内容を深めた。なかでも「導入の工夫」「音楽を深めさせる工夫」については、色々な意見がかわされ、各校の実態にあった指導法を検討した。また「行事での校歌指導」についても、具体的な対策などを話し合うとともに、日頃の授業の中で、いかに音楽的感動を得させることができるか、9月以降各校にて実践研究を深めることになった。「選曲の工夫」についても、演奏テープを聴きながら、生徒の実態にあった教材、指導法などの協議・検討を進めた。

<9月>

各研究員の事例報告をもとに、主として「合唱指導の現状と課題」について、さらに具体的に検討を進めた。また、各事例がより効果的な指導となるように検討した。

<10月以降>

本研究主題の視点から、各学年における具体的かつ、実践的な指導法を目指して研究し、協議した。（後半の指導事例を参照）

以上のように、本研究員は「合唱指導」における現状や課題の検討を重視し、各学年における効果的指導の在り方などについて研究実践した。

Ⅲ 研究の内容

本研究を進めるに当たって、各研究員が、毎日の授業において、合唱指導にどのように取り組み、どのような課題を抱えているのかなどについて、まず相互に共通理解することを重視した。そのことを通して、各学校の様々な実情や共通の課題等が明らかになってきた。

そして、本研究主題の「音楽的感動を主体的に共有し、充実感を味わうための合唱指導の工夫」に込められた各研究員の願いを理論的に整理するために、各研究員の様々な指導理念を出し合いながら協議を重ねた。その結果、特に、「音楽的感動を主体的に共有する」ことの意義を明確に提示できるようにするとともに、そのための授業における工夫を具体的事例として研究を発展させることが必要となった。

このような研究の進め方によって得られた成果が以下に示す内容である。

1 合唱指導における現状と課題

各学校における合唱指導の実情は、学校や生徒の実態に応じて多様である。また、その実情の中には、共通の課題も含まれていることが明らかになった。それらのことをまとめると次の通りであった。

(1) 各学校における合唱指導の実情

- 意欲的に歌わせることに苦慮している。
- 歌うことは好きであり、大きな声で歌うが、ハーモニーの響きやバランス、詩の理解などについては、指導が徹底せず、表現が深まらない。
- 歌うことに対する生徒の意欲は個人差が大きく、意欲の乏しい生徒に興味を起こさせてクラス全体を意欲的な雰囲気にしていくことが難しい。

(2) 各学校における合唱指導上の共通の課題

- 意欲的に歌わせるには、教師主導型の指導を改善し、生徒一人一人の意欲を起こさせるためのクラスの望ましい雰囲気づくりなど、きめ細かな工夫を行う必要がある。
- 合唱指導を通じて生徒一人一人が心から感動を体験し、その体験を通して主体的に感動体験を共有することを教師自身が常に目指していくことが大切である。

2 音楽的感動を主体的に共有することの意義

(1) 音楽的感動を主体的に共有することはどのようなことなのか。

「音楽的感動を主体的に共有する」ことの中には2つの大切な要素が含まれている。

「音楽的感動を主体的に求める」と「音楽的感動を共有する」ことであり、これらの要素の中には本研究員の次のような願いが込められている。

① 「音楽的感動を主体的に求める」ことの意義

感性を育成するためには、音楽学習の場で、より多くの音楽的感動の体験が必要である。音楽的感動は、生徒の心に充実感を与える。特に合唱指導における感動体験はハーモニーを通して生徒の心に音楽の喜びを与えると同時に、生徒相互の心のつながりを形成する。

生徒は、この感動体験を基盤としてさらに意欲的に音楽活動を行おうとする。その時生徒は、更なる感動体験を志向しているといえる。

生徒がこのような心の状態にある時、音楽的感動を主体的に得ようとしていると言え

る。教師は生徒が心に深い感動を体験できるよう、指導の工夫を図るとともに生徒の音楽活動への意欲についても常に留意していく必要がある。

② 「音楽的感動を共有する」ことの意義

生徒にとって音楽活動は、学習の場においては基本的には集団の中で行われる。したがって、集団の中の生徒一人一人の心が音楽活動による楽しさや感動を体験できるかどうかは、集団としての音楽活動の在り方次第で決定される。

生徒は、自分を含む集団がどのような雰囲気の中で音楽活動しているかについては鋭敏に感じ取ることができる。望ましい雰囲気での音楽活動は、生徒の共通の願いでもある。この共通の願いは、集団としての音楽活動による感動体験を通して一人一人の心の中に満たされた時、相互に共通の体験として意識される。

一つの音楽的感動は、集団としての感動であるとともに、一人一人の心の共通の感動として意識される。その時、生徒の心は一体感を味わうとともに自分の感動の対象が自分だけでなく仲間一人一人の心にも共有されていることを実感するのである。

また、生徒が音楽的感動を共有している時、指導者である教師も勿論、その場面に深く関わっているのである。

(2) 音楽的感動を主体的に共有することはどのようにして可能なのか。

音楽の年間指導計画の中で音楽的感動を体験できる場として最も多いのは、一般的には合唱活動であろう。合唱活動は、集団による表現活動であり、各パートの役割による目標の具体化・個別化、ハーモニーへの努力等によって、深い感動を可能とする重要な音楽活動である。ここでは、合唱活動における工夫の基本的事項を次に示す。

① 「音楽的感動を主体的に求める」ためには

合唱活動の場で生徒が具体的に「歌ってみよう」「練習してみよう」「歌が上手になりたい」等と願うことは主体的な意欲の重要な現れである。このような意欲を起こさせるためのきっかけを教師がつくる必要があるが、この点で指導の難しさを感じている教師も多い。教師のはたらきかけとして、合唱活動のどの部分も、生徒にとって魅力あるものでなければならない。なぜなら、生徒自身の心の中に「歌う」ことへの意欲の高まりがなければ「歌う」ことは不可能であるからである。教師の言葉かけ、わかりやすい目標の設定、主体的な練習の場の設定、生徒自身が主体的に求める目標のレベルアップ化、そして、きめ細かな評価を行うこと等が大切である。

② 「音楽的感動を共有する」ためには

歌う楽しさや合唱の素晴らしさを実感し、心から音楽をつくりあげていく喜びを主体的に求めていくことの中には、当然、生徒集団としてだけでなく、教師とともに作りあげていくという要素も含まれている。

ここに、教師と生徒とのコミュニケーションの在り方が重要となる理由がある。

「共有」するには、学習の場で様々なことに「共感」できるような、信頼関係が大切である。教師として、音楽的指針を適切に示すことは大切であるが、生徒の中から出される音楽への様々な感じ方(感性)にも耳を傾け、共に考え、教師の感性との相互交流をも行えるような雰囲気づくりを行うことが大変重要な要素となる。

3 音楽的感動を主体的に共有するための指導の工夫

(1) 学級の良い人間関係や雰囲気を作るための工夫（場作り、秩序作り等）

音楽を通じて感動を味わうということは人間の最もメンタルな部分の働きによるものであり、人間の心が開かれ、安定しているときに可能となる。

もし学級の中や教師との間にこのような心の通い合いがない場合、音楽の授業を通じて感動を味わうことなどは不可能である。

生徒が（もちろん教師も）安定した心で音楽の授業に臨むために必要な、良い人間関係づくりや雰囲気づくりの在り方として次のことが考えられる。

ア. 心の開放

良い人間関係や雰囲気の前提になるものは、まずお互いが心を開き合うということである。このことを教師側からの働きかけにより築き上げていく方法として、授業を通じて行う場合と、授業以外の場で行う場合が考えられる。下記にそのポイントを挙げる。

(ア) 授業を通じて行う場合

- ・常に明るく笑顔をもって生徒に接する。
- ・一緒に授業を楽しもうとする姿勢を全面に出す。
- ・生徒の個性や長所を認めることを基本とし、良い点を見つけて誉める。
- ・音楽を苦手とする生徒や消極的な生徒への言葉かけを忘れない。

(イ) 授業以外の場で行う場合

- ・学校の行事の場をとらえ積極的に生徒に接しお互いの理解に努める。
- ・学級通信や学級日誌などを通して生徒一人一人に対する意志疎通をはかる。
- ・教師間の協力体制を密にし、生徒指導、学習指導等を効果的に行う。

イ. のぞましい雰囲気づくり

心の開放とは、生徒が好き勝手に行動することではない。

生徒がそのような状態に陥ってしまえば音楽の授業は成り立たず、もはや音楽を通じて感動を共有することなど有りえない。

そのような状態にならないために必要なものは、必要最小限の生徒と教師のルールである。

それに必要なポイントは次の通りである。

(ア) チャイム着席

文字どおりチャイムが鳴り終わったときに全員が席に着いていることであるが、ただ座っているのではなく、すぐに授業に取り組める状態になっていることが望まれる。

(イ) 座席

曲にふさわしい座席配置や合唱隊形など教師が計画した座席に着かせる。ただし歌唱を苦手とする生徒に対する様々な配慮は必要である。

(ウ) 忘れ物対策

注意するなど厳しく接するばかりでなく、忘れた生徒に簡単な特技を披露させるなど、楽しい雰囲気の中で、遊びの要素も取り入れることにより、意外な効果を生むこともある。

(エ) 雰囲気づくり

能動的な活動を生み出す雰囲気づくりには、私語を全く認めないような緊張した雰囲気では伸び伸びとした歌にならないが、一方、全くの自由にさせれば收拾がつかなくなる。学級のグループとしての特性をよくつかみ、全くの私語なのか、授業に前向きな発言かどうか教師が判断して授業を進めていく必要がある。

(オ) 授業の流れの定着

生徒に授業の流れを繰り返すにより理解させることで、生徒の動きがよくなり授業をスムーズに運ぶことができる。しかし一方ではマンネリ化による生徒側の興味の喪失ということもあり、日頃の教材研究を基にした新しい試みも欠かすことはできない。

(2) 授業の導入における工夫

授業の開始時にどのように生徒に接し、どのように授業に入っていくかということは教師としていつも悩むところであり、常に新たな工夫が必要である。この導入が成功するかどうかはその授業の成否の一つの鍵を握っている。

授業の導入における工夫を日常の授業と入学時、学年、学期の初めの授業の場合に分けて示す。

ア. 日常の授業の導入における工夫

ここの目的は生徒をリラックスさせると同時に適度な緊張感を作り出し、授業内容への展開をスムーズに行えるようにすることにある。

実際の工夫としては次のようなことが挙げられる。

- ・生徒の様子をよく観察しどのような状態にあるか把握する。
- ・授業の初めに叱ってしまうと生徒が萎縮し声が出なくなってしまうので、笑顔で接し、楽しく授業展開できるようなムードづくりをする。音楽とは全く違う話をするのも生徒の気持ちをほぐすうえで有効である。
- ・既習曲を発声練習の代わりに歌わせたり、生徒の好みの曲や良くハーモニーの出る曲を歌わせたりする。歌謡曲の既興ではさんだり、校歌を用いる例も多い。

イ. 初めの授業の導入における工夫

入学時、学年、学期の初めの授業は、教師と生徒、生徒と生徒も初めての出会い、あるいは久しぶりの対面でお互いに緊張するときである。そしてこの時の接し方がその後の授業の流れや人間関係に大きな影響を及ぼす。

生徒も最初の授業には期待と不安をもって臨んでおり、教師としては次のような工夫を折りませ、細心の注意を払いながら生徒に接する必要がある。

- ・普通教室でのオリエンテーションを行い、その中で生徒に教師像を定着させる。
- ・一人一人名前を呼びかけ握手をする。
- ・卒業した小学校の校歌を生徒にお互いに紹介させる。
- ・教師がギターのエレキギターなど音楽の実技を披露する。

(3) 選曲の工夫

選曲は指導計画作成上、大切な要素であり、中学校3年間を見通した選曲が必要である。系統的な選曲を通して、第3学年では卒業時に混声4部合唱ができ上がることが、教師の願いであろう。なお、変声期のことも十分考慮して、指導しなくてはならない。そのことを踏まえた上で、学年ごとの選曲を行う必要がある。

選曲の際の留意点は、次のことが考えられる。

- 比較的短くて、覚えやすい曲——「夏の日の贈りもの」
- 伸びやかに発声する曲——「夢の世界を」「はばたこう明日へ」
- あまり難しくない曲——「そのままの君で」「流れゆく雲を見つめて」
- 各パートに主旋律がある曲——「時の旅人」
- のりのよい曲——「あの素晴らしい愛をもう一度」「明日に渡れ」
- しっかりと歌える曲——「山のいぶき」「夕なぎの海」
- ア・カペラで歌える曲——「さようなら」「仰げば尊し」
- 生徒の心情、発達段階に合った曲——「モルダウの流れ」「カリブ夢の旅」

これらの他に、ほとんどの中学校で行われている合唱コンクールで歌われた曲の中で、特に印象に残った曲、即ち生徒のリクエストにも目を向けることも大切である。更に季節に合った曲、各行事との関連を意識して選曲する必要もある。

(4) 発声指導の工夫

楽しく自然に発声法が身につくことが望ましいが、実際には難しい。教師が模範を示すことも一つの方法である。実際に教師が示すことは、どんな理論で説明するよりもわかりやすく、効果的である。

地声との違いは、十分理解させる必要がある。また、立ち方は、例えば足を開いて床を押すようにして構える形が効果的である。発声練習用の「こんにちは」「さようなら」「マイマイマイ」「IIVVIのカデンツ」などは、多くの学校が活用しているパターンである。

(譜例参照)

また、校歌、既習曲の中で発声練習をさせることも良い方法である。他にも、以下のものが考えらる。

- 母音、子音での発声練習
- 無声音での歌詞読み（歌詞をはっきりさせる）
- パート練習中での背のび発声（つま先立ちをして、腹筋力をつけさせる）

これらの方法が、望ましい発声につながることに気づかせることは必要であるが、決して長時間やるのではなく、短時間で端的にわかりやすくすることが大切である。毎時間行うことにより、男女の音質共深みのある充実した、つやのある声が生まれてくる。

(5) リーダー育成及びパート練習の工夫

ア. リーダー育成

女子の中には、音取り・伴奏のできる、いわゆるリーダーの役割りを果たせる生徒が何人かはいるが、男子は少ないのが、多くの学校の現状であろう。そのような現実を踏まえ、まずパートリーダーを次の点を考慮して決めることになるろう。

- ・意欲のある生徒
- ・声をしっかり出せる生徒
- ・旋律が弾ける生徒
- ・みんなが協力できる生徒

リーダーとなった生徒には、どのような要領でやっていくのか、事前に指導しておくことが必要である。

イ. パート練習の工夫

まず初めに、学習する曲の範唱テープを聴かせる。次に、各パートがピアノ・オルガンなどのまわりに集まり、リーダーを中心に練習する。時々教師が回って助言をし、改善点なども示してあげる。この時に、ほめることも決して忘れてはならない。他に、テープを前にリーダーを中心に、輪になって行う方法もある。それには、あらかじめパート別テープ作りをしておく配慮も必要である。パート練習ができ上がったところで、範唱テープを更に再び聴かせると、新たな意欲が湧く。全体の生徒にも、毎回のパート練習での善し悪しを評価させることも、大切なことの一つである。(図参照)

このように、練習の中に評価を適時に盛りこみながら指導していくことにより、心の中に仲間意識が育ち、ひとつの曲としてでき上がっていく。

(譜例)

「こんにちは」
「さようなら」

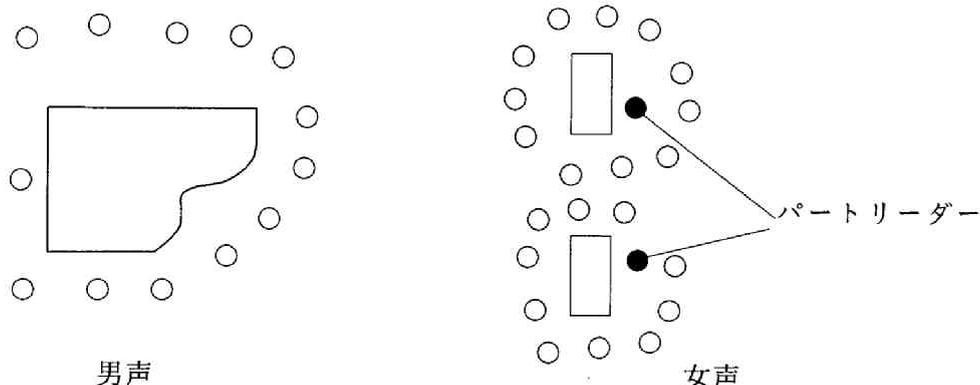
こんにちは
こんにちは
こんにちは
こんにちは

「マイマイマイ」

f (先生) (生徒) (先生) (生徒)

マイマイマイ マイマイマイ マイマイマイ マイマイマイ

(図)



(6) より美しい合唱の表現力を育成するための工夫

のびのびとゆたかな声で歌い合わせることが合唱指導の大切な目標であるが、「ただ歌う」ことから脱却するための工夫について2つの視点から次に示す。

ア. 心情面

「無表情」で歌う生徒たちに、歌詞を理解し、自分たちの気持ちを表現することを目標に歌わせるためには以下のような事が重要な点だと考える。

- ・歌詞を朗読する。(詩の内容、言葉の持つリズムを感じる。)
- ・曲に対するイメージをはっきりさせる。(イメージ画を描くなど。)
- ・曲の構成を考えさせる。

楽譜に出てくる横書きの歌詞を縦書きの詩に直して読む——このことで生徒たちは内容を深く理解し、「いい歌詞だね。」という声も聞かれるようになる。さらに、声に出して読んだり、イメージ画を描く事で、内容をより身近に感じたり、自分のものにすることができる。歌詞の解釈の過程では、グループで話し合わせたり、発表し合うことも有効な方法であり、このような中で何が大事なのか、何を訴えたいのか、が明確にされるのではないだろうか。

イ. 技術面

自分たちで抱いた曲のイメージを表現するには、正しい発声で歌うことと同時に、互いの声をよく聴き合う習慣をつけさせることが大切である。

- ・ア・カペラで歌わせる。
- ・常に他のパートの音を聴くように意識させ“ハモる”楽しさを味わわせる。
- ・自分たちの合唱を録音し、聴く。

音に対し、より敏感に聴く耳を育てることは重要である。そのためには時には伴奏なしで歌ったり、曲の中の一部分だけを取り出し、美しい和音の響きが得られるよう何度も繰り返し練習したり、録音テープを聴き、自分たちの声を客観的に判断させるのも良い方法である。曲のイメージに近づくにはどうすれば良いか考え、何度も歌い込むことにより、曲への愛着が生まれるとともに、曲の心情を心から理解することが可能になるのではないだろうか。

(7) 評価の工夫

生徒一人一人の個性を認め、やる気を起こさせる評価を工夫することは教師には欠かせない事である。どの様な場面でどの様な評価をするべきなのかを次に示す。

ア. 実技テストの工夫

- ・発表会(小演奏会)形式で行う。

練習の過程を大切にし、自己評価・反省点などを記録させて発表へ向けて意欲的に取り組ませる。発表会の当日は、全員が観客、審査員になり、互いに評価し合う。友達の良い点を探し出すことに重点を置くよう指導する。このとき、写真やビデオなどで記録をとり、教師のコメントをつけて渡すことが意欲をを起こさせることになる。

- ・グループでテストを行う。

メンバーが協力し合って練習(弱いパートを助ける、曲想を工夫し合う、など)し、

より良いアンサンブルを創り上げようとする過程で、励まし合い協力すること、聴き合うことの大切さが分かり、ハーモニー感が養われる。これらの観点から評価する。

イ. 日常の授業における評価

- ・意欲的に取り組めたか。
- ・集中して取り組めたか。
- ・感動できる場面があったか。
- ・協力し合って楽しい授業ができたか。
- ・わからなかったところやできなかったところに進歩が見られたか。

日常の授業においては、可能な限り生徒一人一人に目を配り、少しでも進歩が見られたり、やる気・工夫などが見られたら適切な言葉かけができるよう心掛けたい。他

との比較のみに陥らず、個人の良い点、成長や進歩の見られた点を発見できるようにする。練習過程での進歩がわかるような自己評価カード・プリントを利用するのも良い方法である。(資料参照)

(8) 行事における校歌指導

学校生活における様々な行事……入学式や卒業式、文化祭、合唱コンクール等と音楽科の関わりは深く、音楽的な感動を体験できる貴重な機会であるのだが、1校あたりの音楽科教師数は1～2人という学校がほとんどであり、行事を成功させるにはかなりの負担、苦勞を伴うのが現状である。その中で、行事や式のたびに歌われる「校歌」は、卒業式などではよく歌うのだが、学期ごとの始業式・終業式ではなかなか大きな声で歌えず、悩んでいる教師も多い。校歌をのびのびと歌うようにするための手だてを検討した。結果は次の通りである。

ア. 原因

- ・歌詞や旋律などが生徒の間隔とかけ離れているので積極的になりにくい。
- ・並び方(男女各1例ずつが圧倒的に多い。)の問題。自分の回りに同性がいないと歌いにくいという心理的原因。
- ・みんなが歌わない状態では、自分一人が大きな声をだすと目立ってしまうから。

イ. 対策

- ・式や行事の前には必ず練習の時間を取り、歌いやすい雰囲気をつくっておく。
- ・声が小さい場合、やり直す、など妥協しないことも教師の姿勢として必要な面である。
- ・朝礼のたびに校歌を歌わせることにより、校歌によりなじませる。
- ・男女各2列で並ばせる、パート別の隊形にするなどの工夫をする。

いったん「歌わない」伝統ができてしまうと、それを打破することはかなり難しい。押しつけ、強制でなく生徒の心を開放し、愛着を持って校歌を歌わせることは教師の願いである。歌わない現実にも決してあきらめず指導していくこと、他教師の協力を得て学校全体で取り組んでいくことが必要である。

● 歌のアンサンブルを聞いて 戸			
年 組		氏 名	
曲 名		作 詞	作 曲
班	メ ン バ ー		評 価
1	S	T	
	A	B	
2	S	T	
	A	B	

※評価の目安
 ①音楽室の隅々まで聞こえる声で歌っているか。
 ②各パートの音程が正確に歌っているか。
 ③全体としてのバランスがとれているか。
 ④メンバーの息が合っているか。
 ⑤曲の感じをとらえて歌っているか。

自己評価

班として	
個人として	

事例1 題材名「はじめての授業（校歌歌詞交換）」第1学年

1 題材設定理由

中学校生活は教科ごとに教師が変わることだけでも、新入生にとっては新鮮な感じをもつと同時に、緊張の連続でもあると思われる。そのような生徒に対する初めての音楽の授業は中学校3年間の音楽活動の導入でもあり、どのように展開することが望まれるであろうか。

学校によっては新入生のほとんどが同一小学校出身者の場合や、複数の小学校から生徒が入学してくる場合があるが、いずれの場合も中学という新たな人間関係の中で緊張していることが多い。このような生徒たちに対し、4月1日の新入生受け付け時や、入学式前日に実施する新入生入学式事前練習の際に上級生による校歌紹介を行い、新入生も入学式までにはほぼ全員が校歌の1～3番を歌えるようになっている学校の例も報告されている。

このような新入生の心理状況を踏まえ、以下の理由により本題材を設定した。

- (1) 「音楽の授業は楽しい」という印象を与えることで、「感動を共有する喜び」が実感できる授業の雰囲気づくりをめざす。
- (2) 各小学校出身の生徒相互の意思の疎通や望ましい人間関係づくりを図る。

2 指導目標

- (1) 中学校の校歌がすでに歌えることに対する自信と誇りを持たせる。
- (2) 詩は共通のリズム（日本語では七五調又は、五七調）によって作られているものに気付かせる。
- (3) 校歌（本事例では4分の4拍子）の指揮練習をおりませることで、楽しい中にも集中力の必要な授業であることを体得させる。
- (4) 以後の授業に期待を持たせる。

3 指導計画（1時間扱い）

指導内容

- ・授業開始のあいさつの方法
- ・校歌斉唱
- ・出身小学校校歌の歌詞を中学校校歌のメロディーで斉唱する。
- ・校歌の指揮を練習する。

4 指導の展開

学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
座席の確認	出席番号順、横長に男女各3列ずつ着席する。	・静かな雰囲気の中かで指示する。
授業開始のあいさつの模倣	教師のピアノの合図で全員起立する。 教師の歌うメロディーを模倣する。  <p style="text-align: center;">mp</p>	・反応の遅い時はやり直す。 ・元気のない時はやり直すが、導入なので紹介する程度にする。



こんにちは こんにちは こんにちは

どの高さが歌いやすいか、どの程度模倣できているか。

出席確認

新入生呼名のように氏名を呼ばれたら大きな声で返事をする。

校歌斉唱

覚えたての校歌を1番から3番まで斉唱する。

生徒がよく声を出しているか、出しにくい音域はどのあたりか、元気が良いか。

出身小学校校歌の歌詞紹介

近隣小学校出身者は自校校歌の歌詞を思い出す。

「ふじのたかねを あおぎみて・・・」

他の小学校出身者も自校の校歌の歌詞を思い出す。

例「れいろうに ふじをみさけて・・・」

生徒は各小学校の校歌をお互いに大切なものとして受け止めようとしているか。

中学校校歌のメロディーによる小学校校歌の歌詞唱

教師が近隣小学校の歌詞を中学校校歌のメロディーで歌い、生徒はそれを模倣する。

新鮮な驚きをもって、楽しく歌っているか。

他の小学校の歌詞を中学校校歌のメロディーで歌う。例「ふじをみさけて れいろうに・・・」なぜこのようなことができるのかを考え、発表する。

七五調の詩であれば中学校校歌のメロディーで歌唱可能なことに気付くことができるか。

詩のリズムの理解

日本語の詩にみられる共通のリズムを理解する。創立時期の早い学校の校歌は、七五調又は五七調の歌詞によることが多いことを理解する。

・集団としての男声の音域を把握する。

・個々の声の高さ、声量を把握する。

・入学式までにすべて覚えたことを事前に賞賛する。

・ひらがなで1番のみ板書する。

・思い出せる所まで板書する。

・ほめる箇所を見つける。

・まず1番を通して聴かせ（無伴奏）、次に伴奏を弾きながら歌わせる。

・歌詞が五七調の場合は前後を入れ替える。

・中学校歌の歌詞と七五調でてきている校歌の歌詞の共通点を考察させる。

・既知の百人一首等を発表させる。

・中学校歌の歌詞を出身小学校校歌のメロディーで歌うことをすすめる。

4分の4拍子の指揮	<p>歌詞のリズムのおもしろさを感じてきたか。</p> <p>全員で中学校校歌のメロディーに合わせ4分の4拍子を指揮する。(最初は片手、次に両手で)</p>	
以後の授業内容の予告	<p>全員が楽しそうに集中して取り組んでいるか。</p> <p>今後指揮について毎時間少しずつ練習し、必ず全員に発表の機会があることを確認する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 教師は左手でピアノを弾き、右手で生徒と左右逆に指揮する。その際、跳んで左右上又は跳んで中外上と指示する。
授業終了のあいさつの模倣	 <p>さようなら さようなら さようなら</p> <p>中学生として初めての楽しい音楽学習として感じたか。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 簡単な指揮は誰でもできると助言し意欲を高める。 ピアノの合図で起立した後に教師の模倣をする。

5 感動にいたるまでの工夫

教師が小学校校歌の歌詞を中学校校歌のメロディーで歌う時、生徒たちは信じられないといった様子で聞き入り、歌唱後は思わず拍手する。そしてできるのだろうかという思いで歌い始めるが、見事歌い終えた生徒たちの顔には自信がうかがわれた。

この場面設定をより効果的にするために以下の点に留意した。

- (1) 教師が歌う時は無伴奏で、生徒ができるだけ声を集中できるようにする。
- (2) 生徒が歌う時、歌詞とメロディーの合いにくい箇所は教師が先取りして範唱する。
- (3) 教師ができるだけ「どうしてだろうね」という問いかけをすることにより、人間関係づくりを図る。

生徒の一言より

- いろいろな学校の校歌がこの学校のメロディーで歌えるなんて本当にびっくりした。
- この学校の校歌の歌詞を小学校のメロディーで歌うと暗くなるのでやめた方がいい。
- 音楽の不思議さを感じた。よくできていると思った。

6 以後の授業風景

- (1) 授業開始のあいさつは1月後くらいから3部合唱へ以降して行く。
- (2) 指揮については毎時間ひとつずつ新しい課題(終わり方、予備拍、強弱、伴奏から歌唱への移り方等)に5分程度取り組み、全員が必ず授業開始後すぐに校歌指揮を行うようにパターン化する。校歌以外の曲にも取り組んで行く。

事例2 題材名『遠い日の歌（パッヘルベルの「カノン」による）』第2学年

1 題材設定理由

・この曲は上級生が合唱する場面を聴く機会が多い事から、そのメロディーに日頃から親しんでおり、抵抗なく取り組める。また、混声三部の演奏形態であるため、男子全員で同じ音を取り協力して歌え、音域的にも無理がない。どのパートにも魅力的な旋律があるこの教材を、伸び伸びと心から感動を共有しながら歌う事を目指して、本題材を設定した。

2 指導目標

- (1) 伸び伸びと自信を持って、一人一人が主体的に歌えるよう心掛ける。
- (2) お互いのハーモニーを聴き合い、豊かな響きを味わう。
- (3) 音楽に対する意欲の育成を重視すると共にクラスの団結を図る。

3 指導計画（6時間扱い）

第1次（2時間扱い）の指導内容

- ・前年度のビデオ・テープ等を、楽譜をみながら聴き、曲の雰囲気をつかむ。
- ・音取りを始める。（女子は、パートリーダーを中心に。男子は最後までひととおり、教師がみる。ピアノ・オルガン等を使い、場所をローテーションしていく。）

第2次（2時間扱い）の指導内容

- ・2つのパートを組み合わせ、（ソプラノと男子・アルトと男子というように）女子が、リーダーシップを取り、自分達で合わせる練習をする。残りのひとパートを、教師がピアノの周りに集め、音の確認を行う。
- ・その後、細かい歌い方・強弱について指示し、生徒はすべて楽譜に記入する。

第3次（2時間扱い）の指導内容

- ・表現の工夫。
- ・響きの豊かさを目指す。

4 指導の展開

学習内容	学 習 活 動	指導上の留意点
和音練習 声だし	4つのパートに分け、カデンツ I - IV - V - I の和音によりニ長調からヘ長調ぐらまで上昇させる。 既習曲を歌う。（いつも同じ曲にならないように配慮する。）	お互いの音を聴き合っているか。 響きが作れているか。 積極的に声を出そうとしているか。
	生徒の伴奏により「遠い日の歌」を最後まで通す。 細かい点を指示していき、自分の楽譜に記入させながら、理解させる。	音程はどうか。 きちんと指示が聞け、理解できているか。
		

<教師の一言> ・unis. の所は全員がメロディー。はっきり発音しないと、何を語っているのかわからない。特に○印の部分は、子音をしっかり言ってみよう。

・↗は、下から持ち上げるのではなく、上からボンと乗せるようにしよう。顔の表情を変えとできるよ。(実際にやってみせる。)

・地声で押さないように。(地声とそうでない響きを示し、生徒にどのように感じたかを聞いてみる。)

ハーモニー練習

母音譜で歌ってみる。
ア・カペラで歌い、お互いの響きをよく聴くと共に、各パートが、どのように歌って(動いて)いるのかを確認する。

音程がしっかりとれているか。
お互いのパートを注意し耳で聴き合っているか。

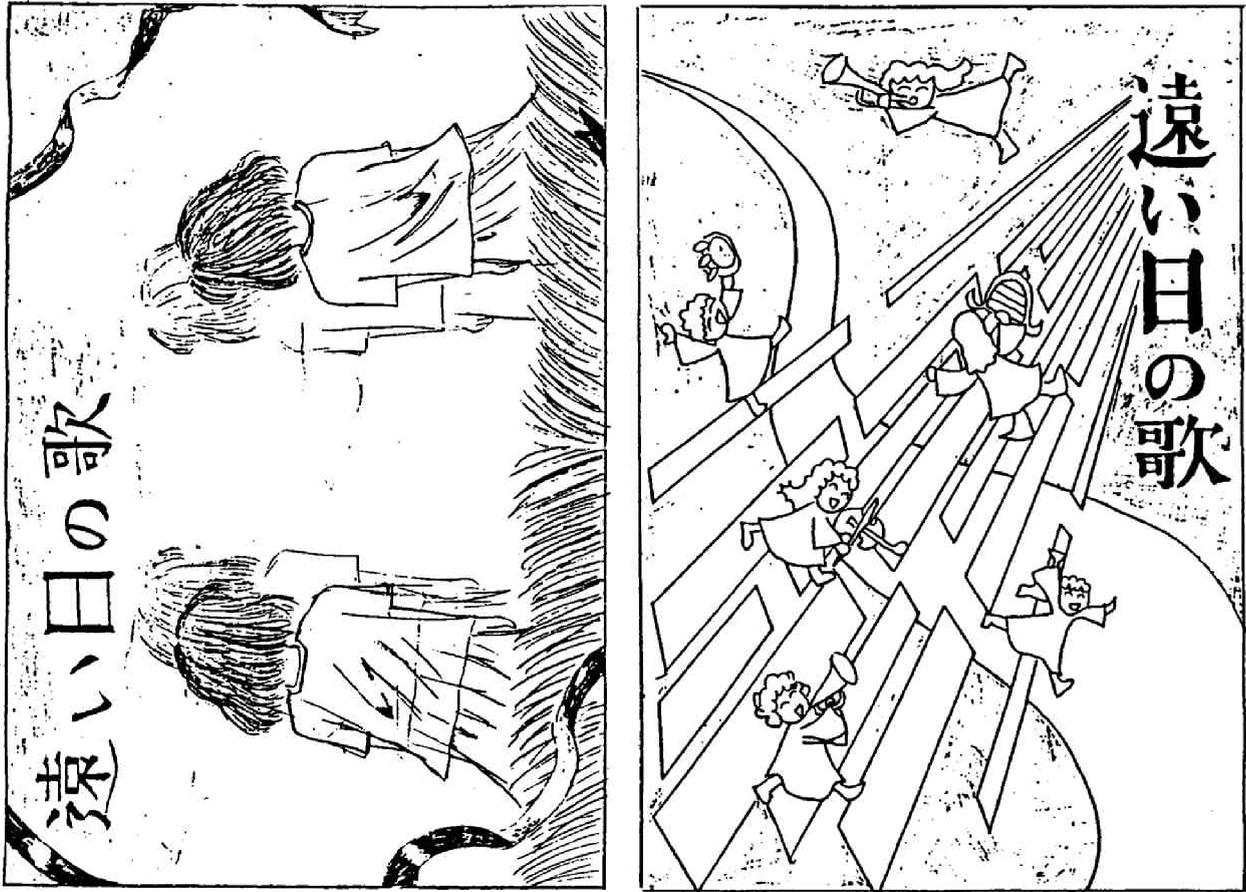
<教師の一言> ・強弱記号を意識し、どのパートが聴かせどころなのかを考えてみよう。
肩・のどに力が入っていないかな? らしくに・柔らかく・そしてきれいにをモットーとしてごらん。

イメージ作り

各自でどのうよな場面・情景を思い浮かべながら歌っているかを発表する。
今日できた所まで、指示したことをきちんと表現できるように考えながら、伴奏に合わせる。
最後に、イメージポスターを描けるように構想を考えておくように伝える。

この時間の中で、前回と比べて、良くなったと思える部分を生徒に伝え、さらに次に向上しようとする意欲をもたせる。

◆生徒達が描いたイメージポスター



5 感動にいたるまでの工夫

- 各自が、正確な音程・リズムで表現できるようになることは大切だが、それと共に歌い親しむことは、大きな意味がある。一つの曲を通して学習を深めることによって、詞に対するイメージも一層豊かになると共に、曲への共感も生まれる。そのためにも、美しいハーモニーは、重要なポイントの一つである。この曲を始めた頃は、転調した部分の2部を除いて、(この部分は、男子が4分音符であることから急いで歌い、混声三部で合わせると女子と一致せず、たてラインが合わない状態が続いた。)音取りもスムーズに進み、音楽的に歌うことができた。しかし発声面は、地声と裏声のちがいが目立った。そのため、交替に前に出て聴いたり、自分達の歌声とCDとを比較していくうちに、発声を少しずつ理解し始め、生徒たちの方から、「地声で出さないで」という声が聞かれるようになりつつある。
- 教師自身も生徒の中に一緒に入り歌っていきながら、1時間の中で、できるだけ子供との接点を見つける努力を重ねている。このように、生徒と共に音楽を作りあげる姿勢を示すことによって合唱の良さを理解させることは大切なことである。

事例3 題材名「音楽的感動を共有する合唱指導」第3学年

1 題材設定の理由

音楽の感動は、聴く者と演奏者とが共有できる体験であり、感性の育成には欠かせないものである。このような演奏の場における大きな感動に至る過程の中に、生徒全員が心をひとつにして、合唱に取り組み、曲を完成させていく努力の体験が感動をともなった合唱として存在することが可能である。

合唱コンクールや、全校合唱を目標に、生徒達が一生懸命歌い、壮大な合唱を作っていく過程を通して、より大きな感動を共有させることを目指して本題材を設定した。

2 教材名「大地讃頌」

3 教材設定の理由

合唱コンクールの課題曲や自由曲の中には、必ずと言って良いほど、「大地讃頌」がある。また、卒業式や入学式、対面式等においても、全体合唱で取り上げられることが多い。最近の調査（平成5年度教育研究員報告書）でも、一番歌いたい曲と報告されている。

この曲は、演奏する側も聴く側も感動を共有することができる内容のある作品で、初期の指導から興味を持たせられ、合唱が仕上がっていく程に充実感を覚え、完成時にはその醍醐味と満足感を味わうことが出来る曲である。

4 指導目標

- (1) 歌詞の内容を十分に理解させ、雄大、壮麗で人間愛に燃える意を感じとらせる。
- (2) 荘重な伴奏の響きと、重厚なハーモニーの流れを感じとらせ、教材の曲想を理解させる。
- (3) 各パートの音程を正確に歌わせ、旋律の流れをとらえさせる。
- (4) 伴奏の流れにのり、強弱に注意しながら、盛り上げていく感動を作っていく。
- (5) 全体的なバランスを重視し、調和のとれた合唱に仕上げていく。

5 感動への工夫

生徒数が減少してきており、男女数のバランスも偏っているため、調和のとれた迫力のあるクラス合唱が難しくなっている。その中で、クラス合唱を基盤として、学年合唱や全校合唱を実施し、全体で作り上げる合唱を目標に置いた指導計画をする。

また、授業での取り組みの中では、生徒の自主性や主体性を引き出していく指導を重視し、音楽する楽しみを味わわせていく。特にパートリーダーの育成に重点を置き、自分達で意欲的に練習に励む雰囲気を作っていくよう指導を心掛ける。

6 指導計画（5時間扱い）

第1次 「大地讃頌」の範唱を聴かせ、曲の感じをつかませるとともに、歌う意欲を持たせる。

歌詞を読み合わせ、内容を深く理解させていく。

パート別の練習に入る前に、パート別の旋律を聴かせ、注意する点の指示を与える。

第2次 パート練習を徹底して実施する。

授業終了10分前にソプラノとアルトの2部で練習する。

男子は、ピアノ伴奏で練習する。

第3次 パート練習を繰り返して練習する。ブレスや発音など細かい点に注意していく。

終了10分前にソプラノとアルト、テノールとバスでそれぞれ練習する。

第4次 範唱をよく聴かせ、曲想を確認しながら、パート練習を徹底する。

練習の状況によって4部で練習し、まとめに入る。

第5次 「大地讃頌」を仕上げていく。4部でバランスの良い合唱を目指す。

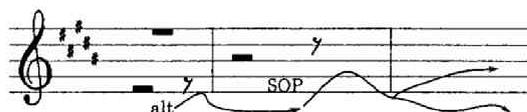
7 学習の展開

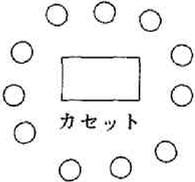
(1) 第4次の目標

① パートリーダーのリーダー性を発揮させ、パート練習を意欲的に進行させる。

② 発音、強弱に注意しながら、迫力のある合唱作りに努力させる。

(2) 展開

指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
<ul style="list-style-type: none"> 既習曲による導入 	<ul style="list-style-type: none"> 「夢の世界を」「夏の日のおもい」を生き生きと歌う。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆音程が正しくとれていたか。 ◆歌おうとする意欲が見られたか。
<p>◆態度観察：授業に入ろうとする意欲的な態度が見られたか。</p>		
<ul style="list-style-type: none"> 大地讃頌の範唱をきく。 	<ul style="list-style-type: none"> 譜面を見ながら、自分のパートを目で確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆音符を読めない生徒がほとんどなので音の起伏を確認させていく。 
<ul style="list-style-type: none"> 全員で合唱する。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分のパートを確実に歌う。 音程の難しい部分をくり返し練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆他のパートにつられて、音程が変化しなかったか、自信を持って音程がとれたかを確認する。 ◆テノールとバスのパートに重点を置く。 
<ul style="list-style-type: none"> パート練習に入る。 	<ul style="list-style-type: none"> 4つのパートに別れ、リーダーの合図のもとに練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆出だしの短3度の音程をしっかりとらせていく。 ◆各パートの練習状況を観察しながら、音程の不明確な部分や、声の出し方について指示、指導をする。
<ul style="list-style-type: none"> グループ練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 3～4つの混声4部のグループに別れ、それぞれのグループで合唱練習をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆それぞれのグループが協力し合い、意見を出し合って、自分達の合唱を作り上げていく努力をさせていく。

指導内容	学 習 活 動	指導上の留意点
<ul style="list-style-type: none"> ○各グループの発表をする。 ○全員で合唱する。 ○まとめ 	<ul style="list-style-type: none"> ○パート、グループ練習の隊形をとる。 <div style="text-align: center;">  <p>○カセット</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ・円陣を作る。 ・相手の声を聴く。 <ul style="list-style-type: none"> ○合唱作りに工夫した点を、発表し、合唱する。 ○反省点を念頭に置きながら歌わせる。 ○合唱を録音し、自分達の演奏を聴かせる。 ○今日の授業で進歩した点や今後改善していく点などを確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆音程がとれてきたら、他のパートを少しずつ加えていき、グループ練習をさせる。 ◆パートリーダーに改善点を発表させたり、みんなに意見を求めながら、合唱を作り上げていく。 ◆各グループの合唱発表をよく聴かせ、声のバランスや、言葉の発音、曲の表現について、意見を交換する。 特に工夫した点について、注目させていく。 ◆模範演奏のテープと比較させて、その感想を発表させる。

8 考察

3年生になると体格が著しく向上し、声の幅が一段と広がってくる。女性の伸びやかな声とともに、男性の響きのある声は、大地讃頌のような壮重さを要する曲には、適したものであると思われる。

しかし、ソプラノやテノールには高音を求められている部分もあり、音程の難しい旋律などを考えると、完成させるには十分な練習が必要であると感じた。

合唱の喜びや感動を得るためには、生徒自らが工夫し合唱を作り上げていく授業を心掛けていくことが大切である。自主的に活動させる指導の工夫を常に考えていく必要がある。

合唱を作り上げていく努力は、発表の段階で喜びと感動になり、言葉では言い表すことのできない充実感が湧いてくるものである。さらにそれは、人数が多くなればなるほど表現の幅も大きくなり、迫力や感動が深くなっていく。

クラスで取り組まれた合唱は、学年合唱から全校合唱へと拡大され、学校行事を盛り上げていくようになることが望ましいと考える。合唱や音楽活動が学校の伝統であり、特色の一つとして、地域に認められるようになれば、感動を共有する輪はさらに広がっていく。

教師の自己満足だけの活動に終止せず、生徒や保護者、地域から強く望まれる合唱活動に成長させていくのが願いである。

事例4 「音楽の自由な表現の学習」 (第3学年選択 — 女声合唱)

1 題材設定理由

生徒の合唱の経験のほとんどが混声合唱であろう。ここでは、生徒に女声合唱のもつ繊細さや柔らかさ・優しさといったものに気づかせ、さらに混声とはまた違う同声の持つ独特な響きやハーモニーを体験させることを目指した。そこで女声合唱の体験の中で、音楽の持つ幅広い表現方法を自主的に学び、工夫する姿勢を育成するために、生徒に自由に表現を工夫させることを重視して、本題材を設定した。

2 指導の目標

- (1) 女声合唱が持つ爽やかで柔らかい響きから、女声合唱に対する興味・関心を高める。
- (2) 曲のイメージを広げ、いろいろな観点から音楽を据え表現しようとする意欲を育てる。
- (3) より一層美しい合唱を工夫させ、音楽にたいしての感動を自ら体験しようとする態度を育てる。

3 指導計画(4時間扱い)

第1次 発声の基本的なハーモニーの練習によって、音色・バランスなどに注意する意識を高め、既習曲に簡単な変化を工夫させる。

第2次 2年生で習った「ラバース・コンチェルト」のメロディを各自に自由に変化をつけさせ、それを基にグループによる、自由な表現を工夫させる。

第3次 「さようならのうた」(石井 亨作詩・作曲)メロディのみを与え、グループに分かれ、詩やハーモニーなど自由に表現を工夫させる。

第4次 それぞれ工夫した「さようならのうた」を発表しあい、感想を述べあう。同じ曲が様々な工夫によっていろいろ変化するおもしろさを感じとらせ、最後に作者の手による原曲を学習して、原曲の持つ美しいハーモニーを女声合唱で表現する。

4 学習指導の展開 (第4次)

	指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
導 入	発声練習	全員ピアノの周りに集合し、発声練習をする (「ソー アー ソ」・「アエイオウ」 「いーま やーまーに」など半音ずつ上下 していく)	☆姿勢・表情・口のあけ 方などチェックする
	ユニゾン ～2部・3部 のハーモニー 練習	全員でひとつのメロディを歌い、2部・3部 のハーモニーで歌える曲をメドレーで歌う (「赤とんぼ」～「エーデルワイス」～「花」 ～「夏の思い出」～「夢の世界を」など)	☆必要に応じて調を変え、 ハーモニーのバランスや 音程・音質に注意させる

	指導内容	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点
展	発表のための グループ練習	前時で課題として与えた「さようならのうた」を「ラララ・・・」で歌ってメロディを確認した後、それぞれのグループに分かれる。前時にまとめた自分たちのアイデアを確認し、グループ練習をする。	☆教師は各グループを回り、アドバイスを与えながら、各グループのとりくみ方をチェックする
	<p>評価の観点：各自のアイデアがどのように生かされているか グループが皆協力しているか</p>		
	発表と鑑賞	各グループごとに発表しあう。その後、聞いた感想や自分たちの工夫した点・苦労したところ本日の出来などを述べる	☆他のグループが工夫している所に注意を向かせて鑑賞させる
<p>評価の観点：発表する側も鑑賞する側も、真面目に取り組んでいるか</p>			
開	原曲の合唱練習	原曲の楽譜を配り、ソプラノ・メゾソプラノ・アルトに分かれて、パートリーダーを中心に、音取りをする	☆メロディ以外は慣れていないので、ていねいに音取りをさせる ☆他の声部をよく聴いて、ハーモニーを合わせる
	美しいハーモニーを創る	原曲を皆で合わせ、この曲が持つ本来の美しさを感じとらせる（もともと女声合唱用に書かれたものではないが、女声合唱でも十分に美しい響きは得られる曲である）	
ま と め	合唱の喜び	歌詞をよく理解し、曲想にあった雰囲気や強弱や言葉を意識しながら「さようならのうた」を仕上げる	☆ア・カペラにしたり伴奏を工夫したりして、表現の多様性を最後に確認させる

5 考察

通常の音楽の授業では、楽譜に忠実に歌ったり、演奏したりしている。楽譜に書かれてある通りに表現しようとする事、それは作者の作品に込められた思いやメッセージを理解し、又感じとり、その曲にふさわしい表現をするためには最も基本的で大切なことである。

一方で、音楽は何ものにもとらわれない自由なものだと言う一面を持つ。曲に対して自由に受けとめ、自由に感じ、自由に表現できる性質を持つのも音楽の特徴のひとつであろう。そんな音楽の多面的要素を学習することで、素直に自分の感じたままに、自分たちの思ったように音楽が表現出来たら、どんなに素晴らしいことであろうか。原曲と自分たちの受けたイメージによる曲が全く違っていても何の問題もない。そこには、工夫という作業によって新しい感性による別の曲が生まれ、個性あふれる曲が誕生するからである。そのような創造的姿勢こそが、音楽的感動を主体的に生み出そうとする原動力につながっていくものではないだろうか。

○本教材は、出版されていないため、ここに原曲者自筆の楽譜を捉載した。

さようならのうた

あまりはやくなく T. Ishii

さようなら さようなら さらさら あうま で じょ
う なら さようなら の さはらしいと き め
り あ え て き ろ こ ん ぜ い う ま で も - の す れ - ば い - じょ
う なら さようなら さあ あい じょ う なら

IV 研究のまとめと今後の課題

本年度教育研究員は、1年間の研究を行うに当たり、平成5年度教育研究員の研究（研究主題「心から音楽的感動を体験できる指導法の工夫」）から次の示唆を得た。

- 生徒一人一人の個性を生かし、豊かな感性を育成するためには、音楽的感動が不可欠であり、合唱表現がその実現の場として、重要であること。
- 音楽的感動が「深い心のはたらきからなる音楽が、聴く者の心の中に流れ込み、音を媒体として相互の心がつながった時の、心が生き生きと働いている状態」（平成5年度教育研究員報告書）であることを踏まえ、生徒の心の中を見つめながら生徒の心が生き生きと働く音楽学習を実現していくことが大切であること。

このことを踏まえ、本年度は、音楽的感動を生徒が自ら求め、意欲的に音楽活動を行うとともに、生徒相互の心のつながりの中で、感動を共有できるように指導していくことを目指し、研究主題を「音楽的感動を主体的に共有し、充実感を味わうための合唱指導の工夫」と定めた。

研究は、各中学校の実情の把握からスタートした。そこでは生徒の個性、特性等の多様化に応じ、意欲的に音楽活動を行わせるための様々な工夫や悩み等が出された。それとともに「音楽的感動を主体的に共有する」ことがどのようなことなのか、また、「そのためにはどのような工夫が必要なのか」等についてもお互いに理解を深めた。

特に「音楽的感動を主体的に共有する」ことの意義を次のようにとらえた。

- 音楽的感動を主体的に求めるためには、心の中の深い感動が大切であり、この体験がさらなる感動を志向できるよう、魅力ある音楽活動を具体的に設定する必要がある。
- 音楽的感動を共有するためには、望ましい雰囲気の中で、集団としての感動体験が一人一人の心の中に満たされていることが求められている。

また、音楽的感動を主体的に共有するための様々な工夫を次のような視点から具体的に示した。

- 学級の良い人間関係及び雰囲気
- リーダー育成及びパート練習
- 授業の導入
- より美しい合唱の表現力の育成
- 選曲
- きめ細かな評価
- 発声指導

以上のことを踏まえ、各学年の実践例を4つ示した。

今後の課題として、次のことを更に研究していくことが大切である。

- 研究主題である「音楽的感動を主体的に共有し、充実感を味わうための合唱指導の工夫」の意義を一層深く理解し、教師自身の指導理念として深めていくこと。
- 今後一層の生徒の特性等の多様化に対応するための合唱指導を工夫すること。
- 合唱指導のパート練習におけるパートリーダーの育成と併せて、パート練習の形態など、指導の工夫を一層改善すること。
- 生徒一人一人が長所を発揮し、意欲的に音楽活動できる場面を一層系統的に設定するとともに、授業におけるこれらの意欲的な音楽活動をきめ細かく評価すること。